



外山 聖子 〒080-21北海道帯広市美栄町西6線128
TEL&FAX:0155(60)2110

とやま・せいこ/昭和34年宮城県生まれ。55年酪農学園酪農短期大学卒業後、十勝支庁十勝東部地区農業改良普及所にて生活改良普及員となる。59年結婚。平成2年、北海道主催「農業に生きる婦人をテーマにした作文コンクール」優秀賞。4年、北海道新聞主催「北海道青年農業賞受賞。地域若妻農業簿記グループ「ポロシリパワフル」会長。平成7年より「おびひろ花の舞（押し花サークル）」を結成し、農村の自然を発信するなど幅広い活動をこなす。家族は夫の勝則氏、夫の両親、男児4人。

無限の可能性を秘めた農業・農村の素晴らしさを、息子や娘に、そして一人でも多くの人々に伝えたい

宮城県の水稲と肉用和牛育成の農家で生まれた聖子さんは、両親の、特に母親を見つめながら育った。生き生きと働く母親の姿に誇りを持ち、母と同じような喜び、感動を味わいたい、感じ取りたいと願い、高校卒業後、北海道の酪農実習を体験。さらに酪農学園短期大学へ進み、十勝東部地区農業改良普及所で生活改良普及員となつて4年、畑作専業農家を営んでいた勝則氏と出会い結婚した。農家の嫁として、妻として、そして4児の母としての毎日を送る聖子さんは、農業・農村が直面している問題の解決への努力を模索し、その中で女性たちの努力と自覚を促す活動を自らがりーダーシップを取り、日夜奮闘している。おびひろ「奮闘記」というに相応しい聖子さんにお話しを聞いた。

「私がそうであったように、子供たちは、両親の、特に母親の生き様を通して、農業、農村を見つめているのではないでしょう。か。そして、結婚して初めて、常に前向きに生きてきた母の姿勢は、父の支えによるものであることに気づかされた」と語る聖子さんは、より良い農業・農村づくりのために大切なのは、男性と女性が、夫と妻が、お互いの人格を認め合い、良いところを出し合って築いていくことではないかともいう。

『おびひろ農業塾』での学びを通して

帯広市では、「たくましい農業・うるおいのある農村づくり」を進める上で、最も大切な「人づくり」を目的とした『おびひろ農業塾』を平成元年より開設した。若手農業後継者を中心に約20名が集まり、それぞれがテーマを出し合つて塾生としての2年間のプログラムを組み立てる。テーマに基づいた講師を各方面から招聘して聞く「定塾」を中心に、道内、道外へも研修に足を運ぶ移動塾、多くの仲間呼びかけ学び合う公開フォーラム等が主なプログラムである。この塾の1期生として学んだ聖子さんのご主人・勝則氏は、夜中に帰宅すると充実した学びを聖子さんに報告。「話しが難しかったり、あまり興味のない話しは子守り唄になったこともありましたが、興味のある話しには目も冴え、会話が弾んでつい夜更かしてしまつたりしたこともありました。でもそんな夫に育てられたのでしようか。私の中で、今度は自分も学んでみたいという思いが生まれたのです」。さっそく二期生として入塾した聖

子さんは「農業、農村は無限の可能性を秘めた素晴らしいフィールドであること。また、それを実現するためには、私たち農業者自らの努力と新しい知恵と勇気が必要だということ学ぶことができました。でも本当に周囲の人々の理解と協力がなければ続けられなかったと思います。というのも塾生として学んでいた2年の間に4男の妊娠・出産をし、さらに泊まりがけの移動塾にも参加したのですから。道内移動塾に行った時など、母もヨーロッパ旅行に出かけており、家は夫と父と当時は3人の子供たちだけ。そのことを研修先で話すとき皆一様に驚くんです。それだけでなく、留守中に訪れた農機具メーカーの人が、男だけで家を守っている状況にびっくりし、会社でも話題になったと聞きました。その時、私自身の恵まれた環境に感謝すると同時に、男性が泊まり掛けで出かけ、女性が家を守っていることなど話題にもならないのに、逆の状況は大きな話題となることを実感し、女性が積極的に学ぼうとする時には大きな制約があることを知らされました」と語る。

農業簿記を学んで積極的に経営参画

平成3年、農業改良普及センターのある農村婦人活動促進事業の一環として、若妻13名が集まり「ポロシリパワフル」という農業簿記学習グループが結成された。簿記という手段を通じて、妻たちも農業経営者のパートナーとしての自覚と意識改革を行なうというもの。具体的には、作業日誌の記帳と経営分析を行なうこと。「一口に簿記記帳といっても家

事・育児・農作業を終えた後、疲れた身体でペンを持つのはなかなか大変。一人では投げ出したくなる記帳も、仲間を励まされつつ頑張っている毎日です。昨年からはパソコンも導入して経営の改善に取り組んでいるんですよ。

女性が経営に参画しようとするには、男性ばかりではなく同性からも厳しい視線を向けられる。しかし「後に続く女性たちのためにも、働く女性々から」経営に参画するパートナー々となるために仲間たちとの活動を続けていきたい」と語る。ポロシリパワフルでは簿記の先進地視察研修に出かけたりするほか、パンジーの播種・育苗をして環境美化活動に努めるなど、楽しくうるおいのある暮らし



外山農場で発送するカボチャとジャガイモの詰め合わせと一緒に送られる「FARM NEWS」新聞名は公募して決まったもの。外山家の温かさや農業への真摯な取り組みが伝わってくる

しを目指している。あわてず、あせらず、あきらめず、を合言葉に、農業経営者のよきパートナーとなるべく活動を続ける仲間たちだ。

産地直送に思いをのせて

外山さんは、十勝の典型的な畑作専業農家。約35haの畑に、ジャガイモ、ピート、小麦、スイートコーン、豆類（大豆・小豆等）、アスパラガス、カボチャを栽培している。が、カボチャの導入は結婚後のこと。本物の食べ物づくりを目指す仲間たちと始めたもので、土づくりから、播種、管理、収穫等、講師を招いて一から教えてもらった。最初は小面積からスタートしたため、カボチャは聖子さんが担当。子育てをしながらの仕事となったが、「自分が主となって仕事は、農業の面白さや奥深さを知るきっかけとなり、数多くのことを学べたように思います。もう一つ大きな収穫としては、産地直送をするようになって、食べられる人々の顔が見えるようになってきたことです」と嬉しそうに語る。というのは、それまでの外山農場の生産物は、工場や集荷場へ出荷する加工原料が主だったため、消費者の顔や声が届くことはなかった。それがこのカボチャの導入により市場出荷となり、また、ジャガイモとの詰め合せによる産地直送を始めたのだ。ここで聖子さんの視点がもう一つ広がりをみせる。

「食べてくれる人、つまり消費者の存在を意識したときから、お互いに顔が見える関係を作りたいと思うようになったのです。そのために、わが家の近況や、

作物がどのように作られるのかとか、料理方法などを掲載した新聞を発行したりして、生産者側の思いを少しでもわかっていたいただき、農村を応援してもらえたら、どの願いを込めて各地に発送しています。ちょっと大げさになってしまいましたが、経済優先社会の中で、『命の源である食べ物づくり』の使命を忘れてしまった近代農業を、消費者とともに修正していきたいという願いを持っているのです。わずかな産地直送ですが、国民の健康、とくに次代に遺伝子を伝える子供たちの健康を守る一役を担えたら、なんでも輸入農産物が急増しているなかだからこそ、私たち生産者一人ひとりが情報発信するべきだと思ひ、新聞を発行することで農業者としてあるべき姿を模索しているんです。こうした発信を受け止めているいろいろなお便りをくださる方も多く、私たちにとっては、その一通一通が大切な宝物であり、安全でおいしい農産物づくりへのエネルギー源となっているんですよ」と目をキラキラさせて語る。

農産物自由化の渦の中で

高度経済成長は、一見豊かな暮らしをもたらしたかのようにみえる。農業・農村は、都市の暮らしに、また工業的な発想を導入したと同時に多くの矛盾と歪をもたらしたのではないかと語る聖子さん。「今、思えば、米を主食とする国民が、パンを食べ、大豆を栽培しているにもかかわらず自分たちの栽培したものは高く売り、味噌や醤油、豆腐、納豆など、毎日の食卓に欠かせない大豆製品は安い外国産の大豆で賄っている。日本

における大豆の自給率は4%を下回るのが現状なのです。私たち、農業者さえもが、実は、輸入自由化を容認していたと言えるのではないのでしょうか。そして、ついには米までもが、大豆の通った道を辿つてよいのでしょうか。物のあふれる豊かさのなかで、先人たちの残してくれた知恵や技術などを考えると、私たちの失ったものは何と多いのだろうと思ふのです。この自由化の波は、実は農業・農村の中で暮らす真の豊かさを問いかけているのではないかと。そして、もう一つ、農業後継者育成とは、農作業に携わる後継者をどう確保するかという観点で問題視されてきたようですが、それは狭義なのではないでしょうか。国内で生産された農畜産物に価値を見出し、購入してくれる国民の育成こそが、広義の農業後継者育成に思っています。そのために、消費者との交流を目的に、収穫体験やファームステイなどを通して、農業理解に努めています。自分の存在する周辺地域の問題だけでなく、日本の農業を考える聖子さんの真摯な言葉だ。

母親の姿を追ってきた聖子さん。気がつけば聖子さん自身の『農』を求め、ご主人や家族、そして多くの仲間とともに歩き始めていた。そしてまたその後継者たちを育て道を切り開いている聖子さんは、最後にこんな言葉を語ってくれた。「良いことをしようとするとき、そこには必ず仲間が与えられます。仲間とともに、一人の女性として、そして農業者として、自然に抱かれながら努力を積み重ねていきたい」